



FSERC News

No. 10

編集・発行：京都大学フィールド科学教育研究センター
住所：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
TEL：075-753-6420 FAX：075-753-6451
URL：http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp

2007年3月

<退職記念特集>

「私の森里海連環学」…………… 河口域生態学分野 田中 克
「退職するにあたって」…………… 森林資源管理学分野 竹内 典之

目 次	
ニュース…………… 1	社会連携ノート…………… 4
研究ノート・トピックス…………… 2	フィールド散歩…………… 4
教育ノート…………… 2	

ニュース

フィールド研「第3回時計台対話集会」報告

海洋生物多様性保全学分野 白山 義久

平成18年12月23日（土）にフィールド研主催で「第3回時計台対話集会」を開催した。今回の対話集会の主題は、「森里海連環学が、日本の木文化を再生する」というものであった。田中フィールド研センター長の開会挨拶のあと、まず村田泰隆氏（株式会社村田製作所代表取締役社長）と尾池和夫京大総長のお二人による対談が行われた（写真）。21世紀の人類社会と森里海連環学とのかかわりなどを中心として、さまざまな話題に関して対話が繰り広げられたが、特に将来の地球環境を守る視点と森里海連環学の視点とのシナジーが強調された。

次に竹内典之フィールド研教授と山田壽夫九州森林管理局長に



村田泰隆氏と尾池和夫京大総長との対談



パネルディスカッションの様子

よる講演が行われた。竹内教授はあるべき森林の姿と現在の日本の森林の状況とのギャップをデータとともに示し、問題の深刻さを明らかにするとともに、問題解決のために考慮すべき課題を提案した。また山田局長は我が国の森林管理に大きな責任を負っている林野庁の現状と指摘されている森林の問題を解決するために実施されている施策について、動画を交えて

詳細に報告され、林業の現状は一時期のどん底から改善しつつあるとの認識を示した。

二番目のセッションの始めには、アウトドアライター天野礼子氏が司会をして、「林業が“生業(なりわい)”とよみがえることが、木文化を再生する」というテーマでパネルディスカッションが行われた（写真）。パネラーは、小林正美京大地球環境学堂教授、小池一三小池創作所代表、石出和博 HOP グループ代表、中島浩一郎銘建工業(株)代表取締役社長の各氏で、いずれも全国各地で多様な木の使い方を実践している経験豊かな論客ばかりであった。特に現在の国産木材の需要の低迷とその解決のための提案は、どれもユニークな観点からの説得力のある提案で、今後の日本林業の再生可能性を十分に期待させるものだった。

最後に、時計台対話集会において重要な位置を占める、フロアディスカッションを行った。講演者やパネラーに対し、高知や新潟など他県からいらした方々も含め多数の参加者から興味深い質問やコメントなどの発言があり、パネラー各位には各々の発言に対して、丁寧に応じていただいた。

今回は新しい試みとして、時計台記念館2階の国際交流ホールにおいて、フィールド研各施設の紹介と、フィールド研が展開しているさまざまな研究プログラムの紹介などが、パネルを使って行わ



国際交流ホールでのパネル展

れた。このパネル紹介はなかなか好評で、熱心にフィールド研のメンバーに質問をしている参加者の方々を多数見かけた（写真）。今回の対話集会の参加者は430名を越えた。アンケート調査の

結果、地理的な条件から、参加者は近畿二府四県が中心だが、それ以外にも、高知・福井・三重・愛知・千葉・長野・新潟さらには沖縄県からの参加者もあったことがわかった。また京都大学の学生の参加も少なくなかった。参加者からは「講義では林業の暗い話ばかり聞かされていたが、今日のイベントでは明るい未来もあることがわかり、勇気づけられた」などの感想が、寄せられた。

またアンケートの結果から、参加者の多くは、口コミでこのイ

ベントの情報を得ていることが明らかになった。このことは、本イベントがかなり定着しつつあることを示唆している。フィールド研の社会貢献という面から、本イベントは重要なものであり、今後もぜひ継続していきたいと考えている。

継続のためには資金的な裏づけが必要である。最後になってしまったが、今回のイベントにおいても、村田製作所から多額の資金援助を頂戴した。この場を借りて深く感謝申し上げる。

研究ノート・トピックス

全国フィールド科学シンポジウム 「森－里－海をつなぐフィールドサイエンス」

河口域生態学分野 田川 正朋

京都大学フィールド科学教育研究センターの主催により、標記シンポジウムが平成18年12月19日に、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールにて開催された。

このシンポジウムは、これまで北海道大学、琉球大学、および京都大学の3フィールドセンターの水圏研究者が、全国規模での共同研究を立案・企画するため、2002年度より行ってきた連携シンポジウムが、いわば発展的に解消して企画されたものである。その第2回となる今年度は、演習林や臨海実験所など全国のフィールド関連研究センターに声をかけ、「森－里－海をつなぐフィールドサイエンス」と銘打って開催された。

演題と演者は以下の通りである。

- 1) 北海道北部での森・人・水のつながり：物質循環と水質形成
柴田 英昭氏
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)
- 2) フィールドサイエンスへのリモートセンシング技術の利用
斎藤 元也氏
(東北大学大学院農学研究科複合生態フィールド教育研究センター)
- 3) 流域環境と渓流生態系の関係 ～生息場構造を通じた連環を考える～
竹門 康弘氏
(京都大学防災研究所水資源環境研究センター)
- 4) ヒノキ人工林流域における水・物質循環
－九州大学福岡演習林御手洗流域における事例－
大槻 恭一氏
(九州大学大学院農学研究院森林資源科学部門・演習林)

- 5) 有明海筑後川河口域の生態系にみる川と海の連環
田中 克氏
(京都大学フィールド科学教育研究センター)

シンポジウム当日は晴天にも恵まれ、約160名の参加者が集まる盛会となった。これほどの方々に参加して頂けるとは当初予想していなかったため、会場では座席が不足し一時立ち見も出るほどであった。聴衆の方々にはご迷惑をおかけしてしまいましたが、主催側としては嬉しい誤算であった。参加者は学生から研究者、一般参加者までと極めて幅広かった。会場での質疑応答も活発かつ多岐にわたり、「森－里－海をつなぐフィールドサイエンス」に対する興味の高まりを感じさせるものであった。

来年度は琉球大学の主催で開催されることが決定されている。

詳細は決まり次第、京都大学フィールド研のホームページ (<http://www.fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/>) にも掲載する予定である。

最後になったが、本シンポジウムにはフィールドセンターの教職員や院生をはじめとする多くの関係者に多大な協力を賜った。シンポジウムの実施を担当した教育プログラム委員会の一員として、この紙面を借りて感謝の意を表したい。



会場の風景



質疑応答の様子

教育ノート

全学共通科目(実習) 「暖地性積雪地域における冬の自然環境」

森林環境情報学分野 中島 皇

本実習はフィールド科学教育研究センターが創設されてから始められた全学共通科目B群(自然科学系科目)1単位の实習で、後期試験後の2月上旬に3泊4日(集中講義)で芦生研究林にお

いて実施されている。京都大学の学生は、一部の積雪地域(山陰・北陸・中部高地地方)の出身者以外は雪や氷に馴染みの少ない者が多い。近年レジャー等で経験は増えているものの、生活の中における或いは自然現象としての雪や氷に対する経験は非常に少ない。シラバスにあるように暖地性の積雪(山間)地域における冬の自然環境を体感すると同時に雪氷調査法入門を習得し、水が態を変えた雪や氷について理解を深め、その影響を考究することを

目的としている。

今年度の実習は暖冬・雪不足で実施が危ぶまれたが、実習メニューと場所を変更することで乗り切った。参加者は文(2)、理(2)、農(3・4)、総人(1)(数字は回生)の5名であった。例年なら15名の定員に倍近い応募者があり、キャンセル待ちまで出るのであるが、これもこの冬の異変である。1日目は芦生研究林へ到着後、幽仙橋まで車で入り(例年だと1m以上の積雪がある。)、カンジキを装着しての歩行訓練を行った。ツボ足で歩くの



自然観察

の目に比べると、どんなに楽(ただ普段通りに大股で歩くと痛い目を見る。)かなどは体験したものでなければわからない。2日目は川に仕掛けておいた流出リター・水棲昆虫トラップの回収と収集した試料の分別やデッサンを行った。冬の渓流に多くの生き物が動き、色々な状態の葉が流れてきていることに、皆驚いていた。3日目は待望の雪が降る中、積雪調査を行った。本来なら条件の悪い中での調査は避けるべきであるが、フィールド調査というも

のがどれ程大変なものかを実感するためにも、天気予報とにらめっこをして設定した。幽仙橋より200m程高い内杉林道で70cmの積雪断面の観察が出来た。4日目はレポート作成と片付けで、午後には園部から山陰線で京都へ帰った。この実習の特徴の一つは、食事のメニュー作成から買い出し、調理、後片づけまで参加者が行い、「同じ釜の飯を食う。」ことである。



積雪調査実習

また、TAの大学院生がフィールドや宿舎でサポートするとともに、夜にはそれぞれの研究紹介をすることも参加者の好奇心を刺激するようである。この冬は宿舎周辺の積雪がほぼ0で、本当の冬の芦生を十分伝えられなかったことは、少し残念であった。これも温暖化の影響か?最後に、北海道研究林で実施されている「研究林実習Ⅳ(2006年度からコードシェアの科目になっている。)」を受講すれば日本の暖地と寒地の雪や氷の実体験が出来ることを付け加えておく。

上賀茂試験地 冬の炭焼き体験会報告

森林環境情報学分野 中島 皇

炭焼きは、かつて日本全国どこの山でも行われており、人口の多い大都市周辺の里山では、特に盛んであったが、昭和30年代後半のエネルギー革命とともに急速に姿を消して行った。現在では備長炭などの一部の炭以外は、ほとんど海外から輸入されているのが現状である。京都大学の芦生演習林でも、その最盛期には年間20,000俵近い炭が生産され、その量は当時の京都大学全体の年間使用量14,000俵をまかなって余りが出る量であったことが記録に残されている。

上賀茂試験地で使用している炭窯は2005年に中根技術班長を中心に昔の炭窯跡を利用して作られたものである。炭窯作成の目的は、エネルギー革命以前には日本中の里山で行われていた炭焼きの体験ができるようにすること。また、農学部や試験地内で生ずるヒノキ間伐材の端材、樹木の剪定で生ずる端材、研究・実験端材、松枯れ被害木(薪として利用)の処分もできるようにと、一石二鳥をねらったものである。体験会は、炭焼きのテストを何回か行った後に、一般公開が出来る態勢が整えられたので、昨年からは試験地の冬の催しとして開催されている。

今年度は2月3日(土)に体験会が開催された。当日はこの時期としては暖かで、参加者は昨年同様ほぼ定員の21名、男女比は2:3で女性が少し多かった。午前10時から講義室で中島試験地長の挨拶及び試験地の概要説明、中根技術班長の炭焼きに関する

説明が行われた。引き続いて全員で炭焼窯に移動し、2班に分かれ作業に取りかかった。午前中は、炭を窯の中から取り出す作業と丸太や竹を割ったり、切ったりする材料の準備作業を交代で行った。午後からは、材料を炭窯の中へ立て込む作業と色々な樹種の炭を燃やし、着火のしやすさや燃え方の違いなどを観察・体験した。最後に、焚き口で薪を燃やし、炭窯の煙突から煙りが出たことを確認して作業を終了した(通常、炭焼には試験地の窯で3~4日かかるため、体験会では前回の炭焼で出来上がっている炭を取り出し、新たに材料を入れ、火を付けるという工程で行っている。)。午後3時頃に講義室に戻り、アンケート記入後、閉会となった。アンケートには、「炭焼のしぐみがわかった。」「貴重な体験ができた。」「炭焼の大変さがわかった。」などの感想が寄せられている。



着火状態の観察

炭窯がそれほど大きくなく、参加者全員が工程を体験するためには20名が限度であるが、この体験会が試験地の冬のイベントとして定着していくことを願っている。



窯への炭材立て込み作業

古座川プロジェクトの展開： 第4回古座川シンポジウム報告

里地生態保全学分野 梅本 信也

「古座川プロジェクト」の社会連携的展開の一つである「古座川シンポジウム」は、フィールド科学教育研究センターおよび古座川流域協議会が共催、清流古座川を取り戻す会、古座川漁業協同組合、七川漁業協同組合、古座川漁業協同組合等々が後援という形式で、2006年11月27日に古座川下流域に位置する古座川町中央公民館で開催され、今回で第4回を数えることとなった。開催当日は古座川流域ならびに串本湾岸住民だけでなく、遠くは大阪市からの熱心な参加者もあった。平日の午後にもかかわらず、約80名の参加者を数えた。今回のシンポジウムとその内容は地域マスコミである紀伊民報、南紀州新聞において大々的に取り上げられ、



会場風景（古座川流域協議会提供）

さらに新聞読者からの反響も年明けまで継続し、古座川とその周辺地域の環境問題に対する関心の高さが実感された。

今回のシンポジウムでは、「古座川プロジェクト中間報告Ⅱ」というタイトルのもと、①古座川の水質と濁り（瀬戸臨海実験所・深見裕伸）、②古座川の魚族多様性（農学研究科・三輪一翔）、③古座川原風景復元（紀伊大島実験所・梅本信也）の合計3題の講演発表を、パワーポイントを用いて約2時間行った。まず、深見助手は、関係する漁協ならびに自治体の御協力のもと、2005年5月か

ら古座川中流域ならびに河口沖に設置されている水質センサーがもたらす継続的データの解析結果の概要を、気象と関連付けて講演、川の濁りと湾域の濁りの関係を議論した。

つづいて三輪氏は、2006年11月現在で第12回を数える古座川合同調査および同報告書を網羅しながら、古座川全域と串本湾における魚族の多様性とその季節消長を、豊富な画像とともに分かり易く紹介し、希少種がたいへんに豊富な古座川流域の適正な総合保全を訴えた。

梅本助教授は、和歌山大学紀州経済史文化史研究所所蔵の古絵葉書とその画像や古座川流域での聞き取り調査結果を用いて、明治時代後期における古座川流域とその周辺の古風景を示し、森里海連環的視座による古座川復興を行う際の原風景理解における共通基盤形成を提案する一方、ふるさと風景に関する世代間の顕著で深刻な認識ギャップを指摘、原風景教育や若年世代への迅速な

原風景継承の必要性を強調した。また、高度経済成長期における河床構造の急速な変容と河床構成要素が持つ吸着作用の激的低下について言及し、流域全体で「川を洗濯しよう」と提案した。河岸、

河床、河川敷を含む川自体を洗濯しようという素朴なこの提案は2007年2月14日に開催された古座川流域協議会第2回幹事会で検討議題となり、所属を超えた作業チームが編成、3月中に現地河床調査が行われることになった。



質疑応答の様子

フィールド散歩

— 2月の各施設、及びその周辺の様子などを紹介してみました。—



木の枝にできた霧氷の結晶
（北海道）



屈斜路湖横の藻琴山での冬期実習風景
（北海道）



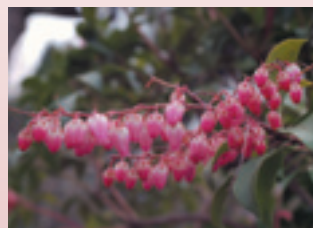
暖冬のため狭湾で越冬する勢いのハリセンボン、彫らむ寸前（舞鶴）



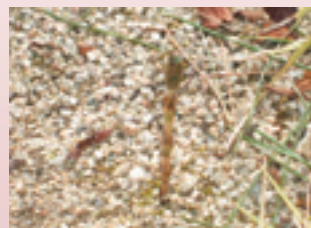
最寒期でも地肌が露わとなったところが目立つ長治谷作業所（芦生）



早くも白いつぼみを膨らませたシキミ
（上賀茂）



鮮やかな紅い花をつけたアケボノアゼビ
（北白川）



春のような陽気に誘われ
真冬に顔を出したつくし（徳山）



白波にも暖かさが感じられる冬の北浜洞門
（瀬戸）

私の森里海連環学

河口域生態学分野 田中 克

京都大学農学部水産学科の4回生に進んで以来、一貫して魚の子供（稚魚）の生理生態学的研究に携わる。大学院時代は生活史の異なる10数種の仔稚魚の消化系の発達を調べ、多様な魚種を比較することにより、共通性や種ごとの特異性を描き出せることを学ぶ。

30代のほぼ10年は水産庁西海区水産研究所（長崎市）に所属して、大学院時代の室内実験研究から野外生態研究へ踏み出す。長崎県平戸島志々岐湾において当時未解明であったマダイ稚魚の生態研究をいろいろな専門の研究者と共同で取り組む。合宿生活（現地に元診療所を借りて「志々岐研究室」を設置）をして漁師との

付き合い方や異分野研究者との激論など貴重な体験をする。長崎時代の後半には有明海のスズキ稚魚を調べる機会に恵まれ、1980年3月に有明海奥部に流入する九州最大の河川筑後川の河口域～河川



有明海筑後川河口域調査

下流域に7定点を設け、以後30年近くにわたる経年調査の土台を作り、その後長期的視点でデータを蓄積することの重要性を学ぶこととなる。

30代の終わりに機会あって本学に戻り、20代の室内実験的研究と30代のフィールド調査を組み合わせた研究をヒラメを中心にハゼ科魚類・スズキ・サワラ・クロマグロ・ホシガレイ・ヌマガレイなど多様な魚種で展開する。この中で、形態学的（組織学的）研究や生態学的研究の他に生理学的研究を加え、より多様な角度から見ることによりこれまで別個の現象と考えていたことがつながり、総合的に見ることの重要性に気づかされた。ヒラメは典型的な変態性魚類であり、産卵期も九州では冬の終わりに始まり、北海道では夏に終わるといって著しい地理的変異がみられる。そこで九州南から北海道西岸まで日本海各地の砂浜でヒラメ稚魚を採集して調べてみると、鱭の数や日成長率に地理的な変異を認め、広域的視点の重要性を知ることとなった。

現在、最も力を入れているのは有明海特産魚を育む特異な河口域生態系の実体とその起源の解明である。最終氷期の終わり頃に海水面が150mも低下し、中国大陸沿岸に存在していた河口域生態系の一部がその後の温暖化の過程で九州西岸に居残り、有明海の成立とともにその湾奥部に遺存し、今日に至る“大陸沿岸遺存生態系”が想定されるに至った。有明海は漁業生産にとっては“宝の海”であり、また特産種の“宝庫”であったが、様々な人為的環境負荷により、今“有明海異変”と呼ばれる著しい環境劣化が進んでいる。

有明海を有明海らしくし、多くの特産種の存在を可能にしているのは、多くの川の流入、とりわけ九州最大の筑後川の流入である。稚魚研究40年を経て稚魚の生態が解明された頃には彼らの息する浅海成育場は消失あるいは著しく劣化してしまった現実

直面し、もはや海の再生には海のことだけを考えていたのでは再生の道はないことに気づかされた。森里海連環学発想の個人的原点である。森里海連環学という統合的学問領域は、稚魚研究で学んできた長期的視点・広域的視点・総合的視点の統合化として生み出されたとも言える。森と川と海のとつながりという当たり前の教育や研究がこれまで存在してこなかったのはなぜであろうか。

平成10年に全学共通教育の一つとして新入生向け少人数セミナーが導入された。大学に入学した直後の期待に胸を膨らませた新入生に経験を積み重ねた教員が特定のテーマを定め、マンツーマン的に科学や学問の世界への興味を喚起する教育を行おうとするものである。この第1回目に農学部の特徴を生かして京都府下で最大の河川である由良川の源流域を占める附属演習林と河口近くに位置する附属水産実験所を結び、最上流から河口域までの植生や魚類相、流域への人々の集中や土地利用の変化を概観しようとするものであった。これが竹内教授との初めての出会いであり、演習林と水産実験所の初めての“出会い”でもあった。総合科学としての農学の理念は、教育現場では縦割りが厳然として存在し、その姿を消していたことに気付かされた。

平成15年4月に理学研究科と農学研究科の森と里と海の4つの附属施設が統合してフィールド科学教育研究センターが発足し、「森里海連環学」が生み出されたのは、大学としての地球環境科学研究構想という“外因”によるところも大きい。縦割り教育研究を乗り越えて自然の仕組みに即した形の教育研究を目指そうとする“内因”なしには実現しなかったと思われる。フィールド研が設置されて4年が経過しようとしているが、森川海連環学としていたら、今日ほど各地で期待され、市民に関心を持たれることはなかったであろう。それは自然科学の範囲を出ないからである。森を今日のような手入れされないままの人工林に変え、川を直線化やコンクリートの三面張りにし、浅海内湾を埋め立て砂浜の消失をもたらしたのは皆人間の生活や生産活動の在り方による。都市を含めた広い意味で“里”をとらえ、里の知恵や里に生きる私達がつながりの価値観を取り戻さない限り、自然の再生はあり得ないのである。



少人数セミナー
「フィールド実習“森は海の恋人”」

つながりの科学的仕組みの解明を基礎に自然や人間社会の再生を目指す森里海連環学は実学であり哲学でもある。私達の予想を超えて一層大きな広がりを持つ学問領域となることを願っている。



少人数セミナー
「C.W. ニコル“アフアンの森”に学ぶ」

退職するにあたって

森林資源管理学分野 竹内 典之



北海道研究林にて

1963年に農学部林学科に入学してから44年、1971年に大学院博士後期過程を中退して演習林助手に採用されてからでも36年弱の長期にわたって京都大学に席をおいてきました。

最初の勤務地は、北海道東部根釧台地の北西隅に位置する標茶町に所在する北海道演習林でした。北海道演習林には1981年まで足掛け11年間勤務し、①根釧内陸部の湿性景観にもっとも大きく関わっていると考

えられる季節凍土に関する研究、②拡大造林期に盛んに北海道に導入されたカラマツの人工林の密度管理に関する研究、③白糠区における針広混交林の動態に関する研究などに従事しました。一日中気温が氷点以上にならない真冬日に山スキーで歩き回ったフィールド調査や北海道大学低温科学研究所凍上部門での資料や情報収集のために夜行列車で札幌に行き、また翌日の夜行列車で標茶に戻ってすぐにフィールドに出たことなど、今振り返ると若い日の楽しい思い出として残っています。

和歌山演習林での勤務は、1982年8月台風直後の赴任になり、台風被害の跡始末に大わらわの職員の皆さんに多大な迷惑をかけることから始まりました。1993年4月までほぼ11年間の和歌山県清水町での生活は、子供たちが和歌山市内の高校に進学したため毎週のように送り迎えをしたり、2～3週間に一度の割で有田川下流の箕島まで買い物に出たりと大変なこともありましたが、しかし、演習林の地主でもある海瀬氏の好意で借り受けた同氏の旧宅は、有田川の水音が聞こえる清水町の街はずれにあり、私が中学生まで過ごした実家を思い出させてくれました。和歌山演習林の所在する清水町は、森林率も人工林率も極めて高く、天まで届かかと思われるスギ・ヒノキ人工林が広がっています。演習林も拡大造林期以降のスギ・ヒノキ人工林が多く、間伐遅れで林床が暗くて下層植生がほとんどなくなってしまった林が多々ありました。ちょうど同じ時期に阪本奨学会の主事に任命されたこともあって、吉野と和歌山のスギ・ヒノキ人工林の密度管理に関する比較研究から着手しました。モミ・ツガを主とした針広混交林の動態に関する研究などにも関心は大いにありましたが、和歌山演習林での11年間はスギ・ヒノキ人工林の実態調査や密度管理試験に追われる毎日でした。

1993年4月に教授に昇任するとともに京都に戻ってきました。カシノナガクイムシによるナラ枯れが兵庫県北部や滋賀県余呉町など近畿地方の北部にも広がり始めた頃で、四手井綱英先生が「自然環境の変化が大発生を引き起こしたのかもしれない、大発生は森林環境を変えてしまうかもしれない。」といったようなコメントを新聞紙上でされていたのを思い出します。農学部・農

学研究科では学部・大学院改組に向けての会議が連日のように開催されていました。1995～97年には農学部・農学研究科の改組と大学院重点化が進められ、1998年4月から演習林は農学部附属施設から農学研究科附属施設へと転換されました。これに伴って、演習林全教官は、森林資源学講座を組織し、森林科学専攻の協力講座として大学院教育に参画することになりました。

演習林においては、総務省や文部省から投げかけられていた適正規模の問題や利用拡大の問題等への対応に苦慮していました。当時演習林長を務められていた神崎康一教授から問題解決に向けて「演習林改革案」や「全学共同利用フォレストステーション案」などが提案されましたが、いずれも日の目を見るには至りませんでした。そのような状況の中で、1996～97年に全学規模で「環境フォーラム」が開催され、「京都大学における地球環境学教育研究構想」が立案され、その構想の一翼を担うべく「フィールド科学教育研究センター」が2003年に設立され、演習林も同センターに参画することになりました。

この間、ほとんど毎日のようにフィールドを走り回っていたのが嘘のように、フィールドに出られる時間がどんどん少なくなっていました。そのような中で、500年以上の歴史を有する吉野林業に関わることによって芽生えていた「日本人と森林の歴史に関する研究」に手をつけることにしました。この研究を進めることによって、里が森や川や海に、森の減少や劣化が川や里や海にどのような影響を与えてきたのか、また、与えているのかが少しずつ分かるようになっていきました。そのような時期にセンター長の田中克教授と出会いました。当時芦生演習林長をしていた私と同教授の「少人数セミナー」のお手伝いをしたのが始まりです。わずか数日の合宿でしたが、私には得るものが多々ありました。

センターへの移行後は、全学共通教育やシンポジウム・講演会など各種の社会連携活動を通して、センター設立の意義、「森里海連携学創生」の現在の意義や森里海の新たな連携創造にとっていかに森の保全が必要であるかなどについて、教育や広報活動を行ってきました。残念ながら研究面ではほとんど寄与できませんでしたが、今年から仁淀川における研究プロジェクトも本格的に動き出すこととなっていますので、退職後も微力ではありますが私なりの活動を展開することによって、センターの教育研究に少しでも貢献できればと考えています。



横浪林海実験所開所式での記念撮影



少人数セミナー

「高知・仁淀川流域の自然」での森林調査